BOOKS 紹介――ほっかいどうの本

（お近くの書店にない場合は発行元へお問い合わせください　特記以外は税込価格です）

遠い日の歌

坂本　勤　著
北海道新聞社　発行
☎（011）210・5744
B6　二百五十六頁　一、五七五円

〝心にポッと火が灯る〟と、『タマゴマンは中学生』三部作は好評です。ちょっと内気で心優しいタマゴマンと、その仲間たちが繰り広げる三年間の中学校生活。その中で彼らが、悩んだり葛藤したりしながら成長していく過程が綴られています。

本書は、このシリーズの著者である元国語教師が、生い立ちや新米教師時代のエピソード、タマゴマン誕生秘話などを綴ったエッセイです。

かつての学校では当たり前だった「ガリ版」印刷。ガリ切りが苦手な著者は、新しい手法の印刷機械が導入された時、「学級通信を毎日でも出せる」と思いました。時には母親も登場する、その学級通信から生まれたのがタマゴマン。このキャラクターは等身大の中学生です。

十勝・幕別中学校で初めて教壇にたってから一九九七年に退職するまでの三十八年間。いつも生徒たちの心に寄り添ってきた著者が振り返る教師時代の想いからは、現在の教育のあり方、学校現場へのメッセージを読み取ることができます。（熊）

ニセコの色

〔北のファインダー〕シリーズ No.01

若林　浩樹　写真
北海道アート社　発行
☎（011）231・7335
20・5×21・5ミリ　六十四頁　一、五〇〇円

縛冷色、瞬希色、永遠色、撫色、瞬夢色……ニセコを十色に分けて紹介した写真集ですが、それらは簡単に想像ができる色ではありません。

例えば縛冷色。地面も空も区別がつかないほど真っ白な吹雪の中で針葉樹の影が薄っすらと浮かぶ風景。積もった雪を吹き上げる風。ふっくらと積もった雪の結晶……短文とともに展開するニセコの雪の世界。一言では表現しきれない多様な冬の表情があります。

ふるさとこぼれ話 ⑨

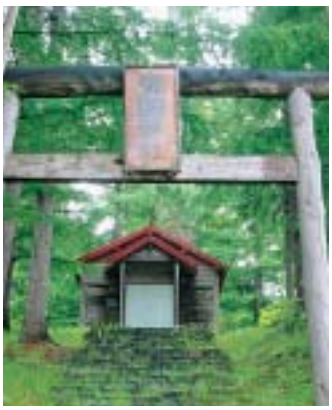
弥照神社

――ニセコ町

有島武郎が農場の解放を宣言
「相互扶助」の理想郷建設説く

後志管内ニセコ町は白樺派の作家、有島武郎（一八七八～一九二三年）ゆかりの地です。武郎が父、武から譲り受けた有島農場があった田園地帯には有島記念館や公園が整備され観光スポットにもなっています。

その記念館から北東に伸びる道を五百メートルほどたどった先の小高い一角に、木立に囲まれて小さな社がひっそりと建っています。皮をむいただけの木で組まれた素朴な鳥居には「弥照神社」の神額。石段の所どころには雑草が顔を出し、訪れる人もまばらなことを物語っています。



武郎の父、武が命名したという「弥照神社」

自らの良心の満足求め

大正一一（一九二二）年七月十八日、武郎はここに農場の小作人たちを集めました。「この日も何やら蒸暑い半曇りの日であった」――。日記にはこう記されています。ひしめく農民たちを前に武郎は、約四四〇ヘクタールもの農地を、農民の共同所有を前提に無償で譲渡すると言い放ったのです。

真意を計りかね戸惑う農民たちに武郎はさらに続けました。

「生産の大本となる自然物、即ち空気、水、土、の如き類のものは、人間全体で使用すべきもので…」（『小作人への告別』）。当時の資本家や地主たちを青ざめさせ、世間を驚かせた農場解放宣言。その舞台となったのがこの質素な社なのです。

一転して、微笑色。オオハンゴンソウの黄色い花が道端に連なる季節。そこには、太陽の光をいっぱい浴びることができる喜びがあります。

千歳市生まれの著者は、光学技術者として神奈川県で過ごした後、Uターンして写真家となりました。

「ニセコの自然に色数が多いという訳ではなく、既存の色と色の間にある微妙な色彩の存在に気がついた」と著者がいうように、切り取られた七十四枚の景色には、ニセコを見つめ続けてきた著者の感性が感じられます。（日）

道展・全道展・新道展

創造への軌跡

道新選書41

吉田　豪介　著

北海道新聞社　発行

☎（011）210・5744

四六判　二百五十四頁　一、三六五円

北海道美術界の代表的な公募展――北海道美術協会（道展）、全道美術協会（全道展）、新北海道美術協会（新道展）が二〇〇五年そろって創立八十年、六十年、五十年という節目の年を迎えました。北海道立近代美術館で、この三団体が初めて連続して記念展を開催したのです。

本書は、北海道の美術界をつぶさに見てきた美術評論家で、小樽美術館館長でもある著者が、三団体の結成当初からの軌跡を辿りながら、北海道の公募展の歴史と現状、今後の公募展について検証しています。

北海道の美術活動を推進し、その振興と普及を図ることを理念とした道展は、一九二五年に第一回展を開催。その二十年後、戦後の北海道美術界で新しい公募展結成の声のもとに一九四六年、全道展が開催されました。さらに十年後の一九五六年、権威主義と技術主義に対抗した第三の公募展・新道展が開かれました。

創立時の歴史的背景と、公募展の機能としての展覧会とアカデミーの二つの要素での進展が、インタビューや資料をもとにわかりやすくまとめられています。（林）

武郎が望んだのは農民たちの自立と「相互扶助」による理想郷の建設だったといいます。小作人の生活は代表作の一つ『カインの末裔』に描かれたように過酷でした。搾取する側の地主でいることは理想主義者の武郎にとっては大きな苦痛だったのです。農場解放について武郎は、小樽新聞の記事中で「自分の良心を満足せしむる為めの已（や）むを得ない」行為だったと述べています。

氷のような淋しい気分

帝国大学新聞に寄せた「農場解放顛末」によると、武郎は明治四〇（一九〇七）年ころには、すでに農場の解放を考えていたようです。しかし農場を拓いた父親を悲しませることになるので「ともかく父の生きてゐる間は黙つてゐることにした」のだといいます。

武が世を去った六年後、農場解放を小作人に告げるため東京から北海道に向かう列車に乗った武郎は、車中の日記にこんな一文を記しています。車窓には八郎潟を望む水田で働くたくましい農民の姿がありました。

「彼等本当に自覚して自主の生活を始めるのは何時の事ならんと疑われる。時々ずつと淋しい気分が胸の中を氷のやうに流れる。此十年程考え抜いていた事がいよいよ実現されると思うと淋しくなるのだ」

淋しさとは亡き父への想いでしょうか。それとも、内心では理想郷実現の困難さを知りつつ突き進むことに、どこか空しさを感じていたのでしょうか。武郎は「農場解放顛末」で農場の将来を「決して楽観してゐない。それが四分八裂して遂に再び資本家の掌中に入ることは残念だが観念してゐる」と吐露しています。

「解放後」見届けず逝く

農場は「狩太共生農団」として戦後の農地改革で解団するまで「有島精神」を受け継ぐのですが、武郎はそれを知りません。武郎が軽井沢で女性記者と心中したのは農場解放の翌年六月のことでした。

「道はなし世に道は無し心して荒野の土に汝が足を置け」

没後に書斎で発見された数首のうちの一首です。かつての荒野は豊かな田園に変わっています。弥照神社近くには農場解放記念碑も建っています。当時、農民たちは武郎の解放宣言を碑文にしようとしたのですが警察が許可せず、刻まれたのは「父有島武開拓之　子武郎解放之」の、わずか二行でした。

農場解放記念碑